教育実践研究　第27集（2017）　199－204

［特別活動］

人間関係形成能力の伸長に重点を置いた小中一貫教育の推進
－小中合同行事の実践を通して－

藤野　　真*

1　はじめに

⑴　問題の所在

現代の日本では，少子化の進行や地域コミュニティの弱体化，核家族化の進行により，子どもたちの人間関係が希薄になりやすい現状があると考えられる。そのような状況の中で，子どもたちや若者においては，いじめや不登校の問題，引きこもりや離職率増加の問題などが喫緊の課題としてあげられる。どちらの問題においても，学校や社会という集団生活の中で，他者と良好な人間関係を十分に築けなかったことが要因の一つとして考えられる。

学校現場において，これらの問題の解決に注力していくことは極めて重要である。学習指導要領（2008）の特別活動の目標には，「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度を育てるとともに，自己の生き方についての考えを深め，自己を生かす能力を養う」とある。つまり，「よりよい人間関係を築こうとする態度の育成」，「自己を生かす能力を養う」ということを目指した指導を行う必要がある。また，杉田（2009）は，「学校の中で人間関係形成能力がうまく発揮できるようになった子どもたちは，社会に出て地域や職場などで不適応を起こすことは少ないでしょう。だからこそ，特別活動を中心として学校生活の中で多様な集団行動をたくさん経験させ，人間関係形成能力が身に付くような活動を積み重ねていく必要があるのです。」と述べている。現代社会においては，多様な他者の考えや立場を理解し，相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えたり，自分の置かれている状況を受け止め，役割を果たしつつ他者と協力・協働して物事に取り組んだりする力は，より必要性を増してきている。また杉田は，「人間関係形成能力も，性格ではなくて学ぶことができる力，つまり「学力」なのです。まず教師がそういう認識をもたなければ，子どもたちの人間関係形成能力を育てることはできません。」とも述べている。したがって，学校教育の現場で，子どもたちの人間関係形成能力を教師が意図的・計画的に育てていくことが重要であると考えられる。

⑵　子どもの実態

本校は，全校生徒22名の極小規模の中学校である。校区の構成が１小学校，１中学校ということで，小学校入学時からほとんど変わらないメンバーで過ごしてきているため，互いに気心が知れているという利点がある。反面，固定化された人間関係から抜け出せず，馴れ合いのような雰囲気が感じられるときもある。また，少人数であるため，本音でぶつかり合うことで，人間関係が悪化してしまうことを恐れているのではないかと感じるときもある。

これらのことから，本校の生徒の「人間関係形成能力」は決して高いとは言えず，改善の余地が大きいと考える。また，仲間から認められる機会が少ないことから「自己有用感」も十分に育っていないのではないかと考えた。杉田によると「本物の人間関係は生ぬるい関係の中では育ちません。相手の人格を否定はせず，けれどきちんと自己主張ができるような切磋琢磨できる集団の中で活動に取り組ませることが重要なのです。そのためには，あたたかい関係性の中にも，ある程度の厳しさが必要になります。」とある。当学区の子どもたちにおいてもまさに当てはまる指摘である。少人数のよさは認めるものの，どうしても馴れ合いの関係になりやすいことは否めない。そのような子どもたちにとって，本気になって取り組まなければならない活動を教師が意図的・計画的に提示し，集団として取り組ませる必要があると考える。

⑶　具体的方策

上記のことから，本校の生徒にとって人間関係形成能力を高めることは重要であると考えた。学校生活を充実させることはもちろんのこと，卒業後の社会生活においても必要不可欠な能力だからである。また，人間関係形成能力を高め

＊ 上越市立潮陵中学校

ることで，互いを認め合うよりよい集団となり，自己有用感も高まることが期待される。

そこで，当学校区で推進している小中一貫教育の中でも，小中合同行事である体育祭と文化祭に焦点を当ててみることとした。小学校１年生から中学校３年生という幅の広い異年齢集団の中で，よりよい人間関係を築きながら，自己を生かそうとする生徒の素養を高めていきたいと考えた。

2　研究の目的

学区１小学校，１中学校である地域は全国的にも増えつつある。また，小中連携教育・一貫教育の重要性もより一層増していくことが予想される。そこで，本研究では「人間関係形成能力」の伸長に重点を置き，小中合同行事の実践を中心に考察していく。生徒の振り返りやアンケート，小中学校の教師の声をもとに検証していき，子どもたちの言動や人間関係にどのような変容がみられるかを明らかにする。

3　研究の概要と考察

(1)　小中合同体育祭（平成27年度実施）

①　試行錯誤で取り組んだ初の合同体育祭

これまでも体育祭は，小学生や地域の方に参加を呼びかけて，競技への参加協力をお願いしてきた。小学生として参加してくれるのは，中学校に兄や姉のいる小学生が多かったようである。そのため，限られた小学生のみの参加であった。平成27年度は，その実態を大きく変えた年である。中学校の体育祭実施日である土曜日を小学校も授業日とし，午前中の全日程に小学校１年生から６年生までの全校児童が参加する形態とした。

そのような実態を受けて中学校生徒会では，「響～全てを巻き込め潮陵健児！～」というスローガンを掲げ，小学生や地域の方々，保護者の皆様から参加していただき，地域を盛り上げられる体育祭を創り上げていくことを目指し，夏休み前から準備活動をスタートさせた。

ア　小学生は参加から参画へ

小学校高学年の児童は，「参加」ではなく，準備段階や当日運営面での「参画」となるようにした。最も時間と労力をかけたのは，小中合同企画種目の話合い活動である。せっかくの小中合同体育祭なのだから，小学校１年生から中学校３年生までが一緒に参加して楽しめる競技を考案しようというコンセプトであった。始めは簡単に思われたのだが，９学年が安全に楽しく交流できる種目という条件をクリアすることはかなりの困難を伴った。その過程で子どもたちは自分たちのことだけではなく，他者（小学生や中学生）の立場や考えを尊重し，互いに協力し物事に取り組むことの必要性や難しさを感じることができた。昼休みを利用して小中学校の代表児童・生徒が何度も話合いを重ね，中学生は小学生が意見を出しやすいように，優しい言葉や笑顔で接する様子などが見られた。最終的には，投げる距離を学年ごとに変えるなど，ルールに工夫を凝らした玉入れを実施することになった。予想以上にルール決めに時間がかかったが，小学生と中学生が歩み寄り，折り合いをつけて実施することができた玉入れは，子どもたちにとっても思い入れの強い種目の一つとなった。

図１　話合いの様子

イ　中学生のリーダーシップの育成

生徒会総務には，「体育祭は自分たちで創り上げるんだ」ということを何度も言い聞かせてきた。そのために，生徒同士で意見を出し合い，どんな体育祭にしていきたいのか，またどんな体育祭にしていかなければならないのかを十分に考えさせ，話し合わせた。その結果，子どもたちは想像以上に，小学生や地域のことを考えていった。自分たちももちろん楽しみたい，だけど，それだけではいけないんだということに気付いたのだ。そんな想いの詰まった体育祭スローガン「響～全てを巻き込め潮陵健児！～」は，彼らにふさわしいものであった。明確なスローガンが定まったからこそ，その後の話合いはねらいが焦点化され，スムーズに進めることができたと考える。最初は，合同体育祭という部分に戸惑いを感じている生徒もいたようであったが，どうしたら小学生や地域の方に喜んでもらえる，楽しんでもらえる体育祭になるのか，どうしたら地域の活性化に繋がるのだろうかと一生懸命考え，話し合い，行動に移す姿が見られた。

体育祭当日は，中学生が主役となって活躍する場面だけではなく，小学生に分かりやすく説明してサポートする場面や，地域や保護者の方を笑顔でおもてなしをする場面など多くの素敵な場面に出会うことができた。小学生や地域，保護者の方に楽しんでもらうことが体育祭の成功に必要だということを生徒たちが感じ，行動に移した結果だと考える。

② 合同体育祭を終えて

ア 子どもたちの様子について

体育祭後にとった生徒アンケートでは，「全校や軍で協力する種目が多かったし，団結力が深まった。」というように，周囲の仲間との関わりに関する記述が多く見られた。また，「小学生との玉入れがよかった。」「小学生と合同だったから絆が深まった。」などの小学生の参加を肯定的に捉えている生徒も相当数見られた。「小学生，保護者，地域の方と協力できた。全員が楽しめた。」「地域の人がたくさん参加してくださった。」「全てを巻きこむことができた。」のような体育祭スローガンを関連させて振り返りをしていた生徒もいた。スローガンの意図がきちんと伝わっていて，意識して準備，運営に取り組んできた成果であると考えられる。

「地域の方との交流をもっと増やしたい」「今年よりも小学生との協力を発展させていきたい」「小学生をもっと巻き込んだ体育祭にしたい」というような次年度に繋げられる生徒の意見も見られた。初の試みということもあり，課題が見られた部分でもある。しかし，小学生や地域の方との関わりに関して「減らしたい」「なくしたい」というような記述は一つも見られなかった。合同体育祭に対して前向きに考え，より良くするための提案意見を出してくれたのである。その点については，評価できるのではないかと考えた。

イ 来場者の感想について

当日，来ていただいた来賓や地域の方，保護者の方に書いていただいた感想用紙の中には，「小学生の参加もあり，中学生のリーダーシップが見られ，良かった。内容も工夫され，とても充実したものだった。中学生の姿に感動した。」「地域一体となったとてもよい体育祭になった。今後も行事など地域と一体となり行っていってほしい。」「老若男女が楽しく参加でき，よいプログラムでした。小学生の参加は来年に繋げ，合同体育祭へと発展させてください。」というような肯定的な感想を多数いただくことができた。中学生には，この感想を紹介し，地域の活性化に大きく貢献してくれたことを伝えた。

③ 考察

初の試みということもあり，最初は戸惑いが感じられた子どもたちであったが，ねらいや意義をきちんと伝え，考えさせることで，生徒会総務が中心となって全校生徒を引っ張ってくれた。自分たちが楽しむことだけを考えるのではなく，小学生や地域の方々など，別の立場の人のことを考え，喜んでもらえるような企画・内容を考えることは，子どもたちにとって貴重な体験であったと考える。

普段あまり関わりのない人たちとの交流も「人間関係形成能力」の伸長に大きく関わったと考える。同じ軍となった中学生とは，夏休み中から軍活動を通して一緒に声を出して応援をしたり，互いに励まし合って大縄跳びの練習に取り組んだりと交流を深めた。体育祭の活動が始まるまではあまり話したことのない異学年の異性などとも，積極的にコミュニケーションを図る姿が見られた。特に先輩が後輩を気遣い，優しく声をかける姿が印象的であった。このことが，よき伝統となり，望ましい人間関係の構築の方法も引き継がれていくのではないかと考えた。

中学生は小学生に対して競技の招集場所への移動をサポートする姿，用具準備担当の小学生にわかりやすく指示を出す姿を見ることができた。また，小学校低学年の児童と接する際には，目線の高さを合わせるなどの工夫をしている生徒も見られた。小学校高学年の児童にとっては，自分たちとあまり年の離れていない中学生が，自ら積極的に動き，体育祭という大イベントを運営している姿は，印象に残ったのではないかと考える。自分もあんな風になっていたいな，もっと自分から動いてみよう，などという気持ちが芽生えてくれていることを期待したい。

地域一体の活性化を目指して，地域の方の参加も募り実施した体育祭であった。町内回覧板を利用して，学区全戸に募集依頼が届くようにした。生徒が直接，町内会長さん宅を訪れ，回覧のお願いと参加用紙の回収に伺った。普段，地域の方とは挨拶を交わす程度であった生徒もいると思うが，学校の代表としてお願いや回収に伺うことは日常にはない体験であったと考える。

これらのように，他者との多様な関わりを意図的に設定したことは，人間関係形成能力の向上に繋がったと考える。

⑵ 小中合同文化祭（平成27年度実施）

① 合唱で心を一つにした合同文化祭

体育的行事で培った小中の一体感や親近感を文化的行事である小中合同文化祭を通して，更に発展させようと取り組んだ。その中でも小中合唱は，「心を一つに」という部分で体育祭とは違った協力が必要であると考えた。指揮者，伴奏者を中学生が担い，全校児童・生徒の心を一つにまとめていくように練習を計画した。また，大勢の保護者・地域の

方も文化祭に来ていただけるということもあり，自分たちの生まれ育った家庭や地域のよさを心に留め，その想いが聞いている人たちの心に届くことを願い，曲目は「ふるさと」を選択した。

午後からは地域の方が講師となる体験教室や地域の伝統工芸や芸能などの地域文化に触れる体験講座を開催した。小中学生，保護者，地域の方がそれぞれ興味のある分野の体験を通して，交流を図った。

② 合同文化祭を終えて

ア 生徒の様子について

合唱練習の際には，歌詞に込められた情景を一人一人が考え，互いに意見交換する機会を設けた。同じ歌詞，同じ学区に育った自分たちでも感じ方や考え方に違いがあることを実感し，他者の多様な考え方に触れる機会となった。

図２ 小中合同合唱の様子

また，練習は生徒のリーダーが中心となって進めた。全体を統括する指揮者と各パートをまとめるパートリーダーが連携を取り，目標を設定しながら練習を進めた。指揮者は，口の開き方や声量，立ち方など気付いたことを発信していた。文化祭に向けて自分たちで創り上げる合唱という雰囲気が日に日に増していった。

小学生との合同合唱では，中学生だけの合唱の時には見られなかった姿が見られた。小学生らしい元気な歌声を聞いて，自分たちはどんな歌声で歌うべきなのかということを肌で感じたようであった。中学生が土台をしっかりと支えてくれているからこそ，小学生が思いっきり元気よく歌えているような印象を受けた。

練習から生徒が中心となってやり遂げた文化祭での合同合唱を終えた生徒たちは，体育祭とは違った達成感や充実感を感じたようであった。振り返りでは，「当日歌い終えた後の観客の方からの拍手にがんばってきてよかったと思えた。」「リーダーとしてまとめるのは難しかったけれど，少しずつまとまりを感じることができた。」のような記述が見られた。

イ 職員の振り返りについて

文化祭後の職員の振り返りの中では，「小学生と一緒に歌った合唱は小中一生懸命で感動的だった。」「地域の人と一緒に地域文化を体験できる活動は素晴らしい。」などとあった。合同合唱は今年初の試みであったが，聞いている人の心に響く素晴らしい合唱となった。子どもたちが「ふるさと」を歌う姿は，きっと地域の方の心に響き，地域活性化の一端を担ったのではないかと考える。また，午後の体験活動講座においても，地域文化を子どもから大人まで一緒になって体験できるのは，貴重な機会となった。講座の進行役を中学生が務め，小学生から保護者・地域の人たちをまとめていた。普段，リーダーの機会があまりない生徒も進行役を務めたことで，自信を深めると同時に他者の立場を理解するきっかけとなったのではないかと考える。

③ 考察

合同合唱をすることで，子どもたちにどのような影響があるかと半信半疑であったことも事実である。しかし，小学生の姿から何かを感じ，自分たちの行動を変えている姿を見ることができた。実際に終えてみて，中学生だけの合唱では見られなかったであろう中学生の成長を感じることができた。普段は並ぶのにのんびりと時間がかかっていた中学生も，合同練習では，小学生の前で見本を見せなければと素早く整然と並ぶ姿は立派であった。その姿は，小学生にとっても憧れの中学生というよいイメージに繋がるのではないかと考える。お互いにとって，合同で合唱に取り組むことは，子どもたちの成長に大きく関わったはずである。

また，直接話したり，接したりということだけでなくても，歌を通じて交流を図ったという部分においても価値があったように考える。体育祭とは違った団結や協力，思いやりという人と人との温かい繋がりが目には見えないのだけれど，歌声には秘められているように感じられた。

(3) 小中合同体育祭（平成28年度実施）

① 反省を生かしてパワーアップした二年目の合同体育祭

試行錯誤の中取り組んだ一年目の実践を振り返り，より良い合同行事となるよう反省を生かしながら計画を立てた。小学校職員の方とも春から打合せを重ね，子どもたちがより成長する機会となるような取組を考えた。まず，小中学校で育てたい子どもの姿を，一貫教育グランドデザインをもとに共有した。それを踏まえて合同体育祭では，どのような活動を盛り込み，どのような力を伸ばしていくのかを話し合った。

表１　《潮陵中学校区一貫教育構想プラン》

９年間を見通した学びの連続性を重視し、着実な成長を実現します

区　分	前　期				中　期			後　期	
指導目標	・きめ細かな指導により、基礎的・基本的な内容の定着を図ります。				・小から中へのスムーズな移行を実現し、自他を大切にする姿勢を育てます。			・義務教育９年間の総まとめとして、自己実現に向けた積極的な態度を育てます。	
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	中１年	中２年	中３年
確かな学力	重点目標：豊かなことばで、自分の思いや考えを表現する子どもの育成								
	・基本的な学習規律と習慣の育成 →				・主体的に取り組む学習方法の工夫 →			・進路実現への主体的な学習姿勢の育成	
	・各種体験活動を通した学びの推進 →				・思いや考えを伝える学び合いの重視 →			・表現、思考、判断を総合した学力の伸長	
	系統的なカリキュラム編成によるきめ細かな授業実践 →								
豊かな心	重点目標：自他を大切にする心をもち、共に高まり合う子どもの育成								
	・集団生活での約束事の習得 →				・自己有用感を高める取組の推進 →			・自他を大切にする姿勢の定着	
	・人とのふれあいを図る活動の推進 →				・人間関係を広げる交流活動の実践 →			・時と場、目的に応じた実践力の育成	
	豊かな人間関係づくりを目指した交流体験活動の充実 →								
健やかな体	重点目標：よりよい生活習慣を身に付け、進んで健康づくりに励む子どもの育成								
	・運動に親しむ場と機会の設定 →				・日常的に運動に親しむ姿勢の育成 →			・運動や健康づくりに励む姿勢の定着	
	・基本的な生活リズムと習慣の育成 →				・主体的な生活時間調整能力の育成 →			・メディアリテラシーを含む生活習慣の構築	

ア　体育祭への想いを共有した話し合い活動

５月末，仲間づくり活動の一環として行っている妙高宿泊体験学習では，体育祭に向けた話合い活動を取り入れた。２・３年生よりも１年生の方が多くなる28年度の体育祭では，早い段階から体育祭に向けた意識付けを行い，特に１年生には体育祭の方向性のイメージをもってもらうことが大切であると考えた。そこで，多様な意見や考えに触れ，お互いの考えていることを知っていくために「ダイヤモンド・ランキング」という手法を使って，どんな体育祭にしていきたいのかを縦割り班で話し合わせた。みんなが楽しみにしている体育祭をテーマにすることもあり，話合いは大いに盛り上がった。２年間の経験を生かして地域との関わりなどについて１・２年生に伝える３年生の姿も見られた。体育祭という一つのテーマをもとに，話合い活動を通して，互いのことを知り，他者の考え方を受け入れるというよい機会となったと考える。

イ　小中合同結団式の実施

前年の職員の反省の中で，小学生にもっと主体的に参加してもらいたいという意見があった。そこで，表１《潮陵中学校区小中一貫教育構想プラン》にある豊かな心分野における目標をもとに，「体育祭に向け，共に高まり合おうとする意識の向上」をねらいとし，１学期末に小中合同の体育祭結団式を実施した。前半には異年齢集団での交流活動，後半には軍毎の応援練習を取り入れた。事前指導として，結団式の趣旨や内容を担任から伝えてもらい，中学生には温かい言葉がけや周囲の状況をよく捉え，自らコミュニケ―ションを図る姿を期待した。

ウ　小学生の参加，交流の増加

小学生に積極的に参加してもらい，小中学生の交流の場面を意図的に増やしていくように小中の教職員で共通理解を図った。具体的には，27年度のものを生かした「小中合同企画種目の実施」，「地域交流種目への参加」と28年度から始めた「小中合同応援合戦」「小中合同リレー」などがあげられる。

合同企画種目の打ち合わせでは，前回の玉入れでは交流する場面があまりなかったため，小中学生が種目の中で協力したり，声をかけ合う場面が生まれるようなルールを考えさせた。小学校１年生から中学校３年生までが安全に交流できる種目について小中学生の代表が話し合いを重ねた。

合同応援合戦では，合同結団式の時から小中の応援練習を重ね，前回から大きく進化した部分であった。中学生が不在時の応援席では，小学生の応援リーダーが小学生をまとめる姿も見られた。少ない練習機会であったが，小学生の元気と明るさ，中学生の力強さが合わさった見応えのある応援合戦を行うことができた。

② 合同体育祭を終えて

ア 子どもたちの様子について

生徒アンケートでは「保護者リレーや幼児，老人会レースなどがあって，会場のみんなが参加できる種目があってよかった。」というように，自分たちだけの反省ではなく，周囲に目を向けたものも多く見られた。

競技中には，本気になって仲間を応援する姿や仲間のミスを「ドンマイ！次がんばろう！」と温かく励ます姿が随所に見られた。閉会式での表情を見ていると，充実感や達成感を得られたであろう表情であった。自分たちの手で創り上げるということで苦労もあったからこそ，体育祭をやり切れたという思いが強かったように感じられた。

体育祭練習，当日の準備から片付けまで最後まで誰一人手を抜くことなく取り組む姿が見られた。その中心にいたのは，教師ではなく，リーダーとなる生徒であった。「素早く移動しよう！」や「自分で仕事を探して動こう！」という声がけをする姿が見られた。これまでは，周囲にそのような声がけをしていた生徒ではなかった。そんな生徒の成長があったからこそ，最後まで全員がやり切ることができたのだと思う。生徒を本気で動かす力をもっているのは，やはり生徒なのだと感じた。

イ 職員の振り返りについて

小中合同結団式の職員振り返りでは「中学生の女子同士で集まる生徒がいた。普段関わりの少ない人と，という趣旨と反するので，気をつけて見ていきたい。」というような反省が見られた。初の試みということもあり，事前の指導不足と生徒たちの戸惑いもあったのではないかと考える。ただ，「中学生から小学生に声をかけようとする姿がみられてよかった。」というような記述も見られた。

また，体育祭当日においては，中学生が競技の運営で応援席を空ける時間が多かった中で，小学生が応援で盛り上げてくれていた。中学生にとって，応援がある中で競技をできるという喜びは感じていたはずである。また，競技を終えて応援席に戻ると，小学生が拍手で迎えてくれる。そんな温かい関係が見られた。

③ 考察

内容の伴った小中合同という意味では，飛躍があった取組であった。小学生がより深く関わることで，中学生にもよい影響があったと考えられる。特に，応援を一緒になってやることで軍のまとまりが強く感じられた。今後も継続して，生徒の自主性を生かしながら小中合同の体育祭を実施していくことで，児童生徒間の関わりが多く生まれることが期待できる。

4 成果と今後の課題

体育祭，文化祭という小中合同行事の実践を通して子どもたち同士の関わりがより深いものになったと考える。一人では達成できない大きな目標に向けて，いつもとは違う集団で取り組むことで，多様な他者の考えや立場を考える機会になった。また，自分の役割を果たしつつ，他者と協力・協働して物事に取り組む力を伸ばすことにもつながったのではないだろうか。異年齢集団の中で，自分の力を発揮し，相手の立場を尊重しながら行動することは，同一集団での活動が多くなってしまう小規模校である児童生徒にとっては重要であり，なおかつ必要な活動であると考える。今後に向けて改善の余地は多々あるが，小中合同行事の実践が人間関係形成能力の伸長という視点からも非常に効果的であり，有効であると考える。

また，中学校区としての取組を進めていく際，どのような子どもに育てていきたいのか，保育園，小中学校，保護者，地域の方々の意思統一がなされた上で，子どもたちを見守り，育んでいくことが何よりも大切である。中でも，人間関係形成能力の伸長においては，小中一貫教育を基盤としつつ，地域や保護者を巻き込んで，意図的・意識的に活動を積み重ねていく必要がある。また，小中学校が一体となり，地域の方たちとも連携・協力をしながら行事を行っていくことで，地域コミュニティ強化の一助にもなるのではないかとの手ごたえを実感できたことが大きな成果である。

今後は，実際に中学校卒業後の子どもたちの姿が，小中での取組の成果となって表れているかどうかの調査を継続的に行って，客観的な検証を行っていくことが課題である。

引用・参考文献

文部科学省，2008，「中学校学習指導要領解説　特別活動編」
杉田洋，2009，『よりよい人間関係を築く特別活動』，図書文化